

東洋文庫

120

平凡社

今昔物語集

6

本朝部

永積安明
池上洵一 訳

ながづみやすあき

永積安明 明治41年山口県生。東京大学文学部国文学科卒(昭7)。神戸大学教授。専攻 国文学。主著『中世文学の成立』(岩波書店),『中世文学の展望』(東京大学出版会),『現代語訳『宇治拾遺物語 お伽草子』』(筑摩書房)など。現住所 芦屋市打出翠ヶ丘町26

いけがみじゆんいち

池上洵一 昭和12年岡山県生。神戸大学文学部文学科卒(昭35)。熊本大学助教授。専攻 説話文学。主論文「欠文の語るもの」(『文学』昭和39年1月号),「今昔物語集の説話受容態度」(『法文論叢』21号)。現住所 熊本市大江2丁目6-35-4

今昔物語集 6 本朝部 [全6巻]

東洋文庫 120

昭和43年8月10日 初版発行

昭和46年7月1日 再版発行



訳者 永積安明
池上洵一

東京都千代田区四番町4番地

発行者 下中邦彦

発行所

郵便番号 102 東京都千代田区四番町4番地
振替・東京29639 株式会社 平凡社

落丁・乱丁本はお
取替えいたします

印刷 株式会社 共立社印刷所
製本 株式会社 石津製本所

© 株式会社 平凡社 1968

0193-801202-7600

凡 例

一 本書の口語訳は、原則として意訳を避け、できるだけ原文に忠実であることを心がけた。ただ直訳のままでは、現代文として成り立たぬ場合、あるいは文意をつくさなかったり、冗長にすぎたりする場合などには、たとえば句の順序をかえたり、主語・客語等を補い、または省くなどして意訳したところがある。俗語的表現は、恣意に陥ることを恐れ、なるべくこれを避けた。

一 本文中□により囲まれた空白部は、それに相当する部分が原本に欠脱していることを示す。

一 「」内の語句は、原本に欠脱している部分を、原本と同文的な類話（原則として『梅沢本古本説話集』・『宇治拾遺物語』等より以前に成立したと思われるものに限定し、それ以後の説話はとらなかつた）、あるいは確実な史料のある場合に限り、それらによって補ったものである。これらの典拠は、それぞれ巻末に注記した。

一 訳文中の人名・地名は原則として原文の表記のままとしたが、（ ）内に適宜補充して読者の便をはかったところがある。

一 平易な用語に訳しにくい難解な語句は、注記により、それぞれ簡略な説明を加えた。

一 和歌・詩文・経文は、原則として、本文中では原文のまま読み方を示すにとどめ、その大意を注として巻末に示した。

一 各説話の標目は、なるべく、原文の読みくだしに近く、口語訳することにとめた。

一 口語訳の原本には、岩波版日本古典文学大系本『今昔物語集』の本文を使用した。

一 本書の挿絵は、井沢長秀の享保版『考訂今昔物語』所載のものによった。(井沢本は、はじめて『今昔物語集』を大衆的に紹介したものであるが、本朝部のみの抄本である。)

一 本書の口語訳にあたっては、前記の日本古典文学大系本のほかに、山岸徳平氏による校註日本文学大系本『今昔物語集』の頭注、長野嘗一氏の日本古典全書本『今昔物語』等を参考にした。中でも山田孝雄・同 忠雄・同 英雄・同 俊雄四氏校注の日本古典文学大系本『今昔物語集』は、口語訳の原本としたばかりでなく、読み方・注解その他にわたって、多大の恩恵をこうむった。特に記して深甚の謝意を表したい。

目次

卷第二十九 本朝・悪行

- 西の京の店屋に入つた盗人の語第一
多衰丸調伏丸二人の盗人の語第二
人に知られぬ女盗人の語第三
世を隠れた人の罍に成る語第四
平貞盛朝臣、法師の家で盗人を射取る語第五
放免ども、強盗のため人の家に入り捕えられる語第六
藤大夫□□の家に入つた強盗捕えられる語第七
下野守為元の家に入つた強盗の語第八
阿弥陀の聖、人を殺してその家に宿り殺される語第九
伯耆の国府の藏に入つた盗人殺される語第十

幼兒、瓜を盗んで父の不孝を蒙る語第十一

筑後前司源 忠理の家に入った盗人の語第十二

民部大夫則助の家に来た盗人、殺害する人を告げる語第十三

九条堀河に住む女、夫を殺して泣く語第十四

検非違使糸を盗んで見顯わされる語第十五

或る所の女房、盗みを業として見顯わされる語第十六

摂津国の小屋寺に来て鐘を盗む語第十七

羅城門の上の層に登り死人を見た盗人の語第十八

袴垂、関山で虚死して人を殺す語第十九

明法博士義澄、強盗に殺される語第二十

紀伊国の晴澄、盗人に値う語第二十一

鳥部寺に詣る女、盗人に値う語第二十二

妻を具して丹波国に行く男、大江山で縛られた語第二十三

近江国の主の女を将て行き、美濃国で売った男の語第二十四

丹波守平貞盛、児の肝を取る語第二十五

日向守、書生を殺す語第二十六

主殿頭源 章家、罪を造る語第二十七

清水の南の辺に住む乞食、女を以て人を謀り入れて殺す語第二十八

女、乞^{こつが}に捕えられ子を棄てて逃げる語第二十九

上総守維時の郎等、双六を打ち突き殺される語第三十

鎮西の人、新羅に渡り虎に値う語第三十一

陸奥国の狗山の狗、大蛇を咋い殺す語第三十二

肥後国の鷲、蛇を咋い殺す語第三十三

民部卿忠文の鷹、本の主を知る語第三十四

鎮西の猿、鷲を打ち殺して恩に報いる為に女に与える語第三十五

鈴鹿山で蜂、盗人を刺し殺す語第三十六

蜂、蜘蛛に怨を報じようとした語第三十七

母牛、狼を突き殺す語第三十八

蛇、女の陰を見て欲を起し、穴より出て刀に当たり死ぬ語第三十九

蛇、僧の昼寝する間を見、姪を吞み受けて死ぬ語第四十

卷第三十 本朝・雑事

平定文、本院の侍従に仮借する語第一

平定文に会った女、出家する語第二

近江守の娘、浄藏大徳と通じる語第三

中務大輔なかつかみのおおすけの娘、近江おんじの郡司ぐんじと成る語第四
 身貧しい男に去られた妻、摂津守せつのかみの妻と成る語第五
 大和国やまとのの人、人の娘を得た語第六
 右近少将うこんの□、鎮西に行く語第七
 大納言うどおきの娘、内舍人うちねりに取られる語第八
 信濃国しなののの姨母おば棄山すてやまの語第九
 下野国しもつけのに住む者、妻を去って後返り棲む語第十
 品賤しんけんしからぬ人、妻を去って後返り棲む語第十一
 丹波国たんばのに住んだ者の妻、和歌を説む語第十二
 夫の死んだ女人、後に他の夫に嫁がぬ語第十三
 人の妻、化して弓と成った後、鳥と成り飛び失せた語第十四

卷第三十一 本朝・雑事

東山科やましなの藤尾寺ふじおのの尼、八幡はちまんの新宮しんぐうを遷うつし奉る語第一
 鳥羽とばの郷さとの聖人しょうにん等、大橋おほはしを造り供養くやうの語第二
 湛慶たんけい阿闍梨あじかり、還俗えんじやくして高向たかむけ公輔こうすけとなる語第三
 絵師えし巨勢こせ広高ひろたか、出家こけして還俗えんじやくする語第四

一五

一四

一三

一二

一一

一〇

九

八

七

六

五

四

三

二

一

〇

一

二

大蔵の史生 おおくらのししょう 、宗岡 むねおか 、高助 たかすけ 、娘 むすめ を傳 か く語第五	一九
賀茂祭 かもまつり の日、一条大路 いちじょうだいろ に札 しず を立てて見物 けんぶつ した翁 おきな の語第六	一九
右少 うしやう 弁師家 べんしけ 朝臣 あそん 、女 おんな に値 あ い死ぬ語第七	二〇
灯火 とうし の影 かげ に移 うつ つて死 し んだ女の語第八	二〇
常澄 つねずみ 、安永 やすなが 、不破 ふわ の関 かき に於 お いて夢 ゆめ に京 きやう に在 あ る妻 つま を見る語第九	二〇
尾張国 おわり の勾 まが 、経方 つねかた 、妻 つま の事 こと を夢 ゆめ に見 み る語第十	二一
陸奥国 むつ の安倍頼時 あべのよりとき 、胡国 ここく に行 い き空 そら しく返 かへ る語第十一	二二
鎮西 ちんせい の人 ひと 、度羅島 とら に至 いた る語第十二	二二
大峰 おほね を通 とほ る僧 そう 、酒泉郷 しゆせんきやう に行 い つた語第十三	二二
四国 しこく の辺地 へんち を通 とほ つた僧 そう 、知らぬ所 ところ に行 い き馬 うま に打 うち 成 なり された語第十四	二三
北山 きたやま の狗 いぬ 、人 ひと を妻 つま と為 な る語第十五	二三
佐渡国 さど の人 ひと 、風 かぜ の為 ため に知らぬ島 しま に吹 ふ き寄 よ せられる語第十六	二三
常陸国 ひたち の□ の 郡 ぐん に寄 よ せられた大きな死人 しにん の語第十七	二四
越後国 えちご に打 うち ち寄 よ せられた小船 せうせん の語第十八	二四
愛宕寺 あたぎでら の鐘 かね の語第十九	二五
靈 りやう 、嚴寺 いんじ の別当 べつとう 、嚴 いん を碎 くだ く語第二十	二五
能登国 のとの の鬼 おに の寢屋島 ねやしま の語第二十一	二五
讃岐国 さぬき の満農 まんのう の池 いけ を類 しる した国司 くにのみかど の語第二十二	二五

解 說

池上洵一

多武の峰、比叡山の末寺と成る語第二十三

祇園、比叡山の末寺と成る語第二十四

豊前の大君、世の中の作法を知る語第二十五

打臥の御子、巫の語第二十六

兄弟二人、萱草と紫苑とを植えた語第二十七

藤原惟規、越中国に於いて死ぬ語第二十八

藏人式部丞、貞高、殿上に於いて俄に死ぬ語第二十九

尾張守、鳥部野に於いて人を出す語第三十

太刀帯の陣に魚を売る姫の語第三十一

人、酒に酔った販婦の所行を見る語第三十二

竹取の翁、見付けた女の児を養う語第三十三

大和国の箸の墓の語第三十四

元明天皇の陵を点する定恵和尚の語第三十五

近江の鯉と鰯と戦う語第三十六

近江国栗太郡の大きな柞の語第三十七

二四

二五

二六

二七

二八

二九

三〇

三一

三二

三三

三四

三五

三六

三七

三八

二七

今
昔
物
語
集
6

本
朝
部

池 永
上 積
洵 安
一 明
 訳

卷第二十九 本朝・悪行

西の京の店屋に入った盗人の語第一

今は昔、□天皇の御代、西の京(注二)の店屋に盗人が入った。盗人が店屋の内にこもっているとの知らせを受けて、検非違使(けんびいし注三)どもはみなその店屋を包囲して捕えようとしたが、一行の中には、上の判官(はんがん注三)□という人が、冠をつけ、青色の表(うえ)の衣(きぬ注四)を着、弓矢を負って指揮にあたっていた。ところが、鉾(ほ)を持った放免(めん注五)がその店屋の戸のところに立っていると、盗人はその戸のすき間からこの放免を招き寄せる。

放免がそばに近づくと、盗人は、

「上の判官に申しあげよ。『御馬からおりて戸のそばにおいでくだされ。お耳を拝借してそつとお話し申したいことがあります』とな」

と言う。そこで放免が、上の判官のそばに寄って、

「盗人がこのように申しております」

と告げると、上の判官はこれを聞いて戸のそばに寄ろうとする。他の検非違使どもは、

「そんなことをなさっては不都合このうえもありません」

と制止したが、上の判官は、これはなにかわけのあることだろうと思って、馬からおりて、店屋のそばに寄った。

するとその時、盗人が店屋の戸を開けて、

「こちらへお入りください」

と言うので、上の判官は戸の内へ入った。判官が入ると、盗人は戸の内側から鍵をかけて、閉じこめてしまった。検非違使どもはこれを見て、

「なんとあきれたことだ。店屋の内に盗人を閉じこめ、まわりをとり囲んで、いざつかまえようという時に、上の判官が盗人に呼ばれて店屋の内に入り、内側から鍵をかけて閉じこもって盗人とお話になる。こんなことは前代未聞だ」

と、腹を立ててさんざんに謗りあつた。

ところが、しばらくすると、また店屋の戸が開いた。上の判官は店屋から出てきて、馬にまたがり、他の検非違使どもものいるところへ近づき、

「これはわけのあることだった。しばらくこの者の逮捕はひかえておけ。天皇に奏上すべきことがある」

と言い置いて、内裏へと参内した。その間、検非違使どもは、なおも警戒の手をゆるめず、遠巻きにして立っていたが、やがてしばらくすると、上の判官が戻ってきて、

「この者の逮捕はまかりならぬ。『すみやかに引きあげよ』との宣旨があつた」

と言ったので、検非違使どもはこれを聞いて、囲みを解いて引きあげていった。上の判官一人はそこに留まり、日が暮れてから、店屋の戸のそばに寄って天皇の仰せになったことを盗人に語った。その時に盗人は声をあげて泣き崩れるのであった。

それから、上の判官は内裏へ引き返し、盗人は店屋から出て、行くえ知れずになった。この盗人が誰かはわからず、またそのわけも誰にもわからずじまいだった、と語り伝えたとのことである。

多衰丸調伏丸二人の盗人の語第二

今は昔、世に二人の盗人がいた。多衰丸たすいまる、調伏丸ちようふくまるといった。

多衰丸の方は人に知られた盗人で、土蔵破りの常習犯であり、幾度も捕えられては獄に入れられた。

一方、調伏丸の方はどういうわけか誰とも知られぬ盗人であった。多衰丸も彼といっしょに盗みをはたっていたのだが、このことが不思議でしようがなかった。調伏丸はその名前だけは知られたが、それが誰であるかはついにわからずじまいだったのである。世間でもみなこのことを不思議に思った。

思うに、調伏丸は実に賢いやつである。多衰丸と組んで盗み歩いていたのに、彼の方だけが誰とも知られずにすんだとは、実に珍しいことだ、と世の人々は評判した、と語り伝えたとのことである。

人に知られぬ女盗人の語第三^{こと}

今は昔、いつの頃のことであつたろうか、侍ほどの身分の者で、名前は誰ともわからないが、年は三十ばかり、背はすらりと高く、少し赤鬚の男がいた。

夕暮れ方、□と□とのあたりを通りかかると、ある家の半蔀^{はじみ}の内から、チュツチュツと口を鳴らして、手をさし出して招く者がある。男がその方へ歩み寄つて、

「お召しでございましょうか」

と声をかけると、女の声で、

「申しあげたいことがございまして。その戸は閉まつているようですが、押せば開きます。それを押し開いてお入りください」

と言う。男は思いがけないことだと思ひながらも、押し開いて内に入ってしまった。するとその女が出てきて、

「その戸に錠をかけてください」

と言う。錠をかけて近寄ると、女は、

「おあがりになつてください」

と言うので、男は座敷にあがつた。簾の内に呼び入れるので、入ってみると、とてもよく□たところに、あふれるばかりの魅力の、二十歳余りの美しい女がただ一人坐っていて、にっこり笑みを浮かべて